「必要なものを、神様はご存じである」

　吉田優介

　あれは20年近く前の話だ。私は一人、列車に乗り、関西から九州を目指していた。揺れる車窓の景色を眺めながら、マタイによる福音書の一節が、何故か私の頭には浮かんでいた。「あなた方の父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」、この言葉が何度も旅の途中に思い出されたことを、今でも覚えている。

私は、縁あって中学生の時から、教会に通っていた。幸運なことに、教会で出会った友人達が、最も自分の心許せるコミュニティーとなり、教会の連なる縁は自分にとって、代えがたい財産となっていた。仲の良い友人達は基本的に同世代だが、一人、自分の親くらいの世代の人物がいた。その人は、近隣の教会の牧師で、たまに私達と会うと、我が子のように可愛がってくれた。私達にとって友人であり、恩師のような存在だった。

大学生になる頃、恩師は自宅で青年会のようなものを企画してくれ、さらに交流は深まった。恩師に子どもはいなかったが、奥様も非常に気さくな方で、ご夫婦で私達を温かく迎えいれてくれた。私達青年達は、季節折々、恩師の自宅に自然と集まるようになった。特に何をすることもなく、仲間で集まって、酒を飲みながら語らう。恩師も若者に交じって長い時間語らいに付き合ってくれた。今思えば、その時間が私の信仰心の形成の一つになったことは間違いない。楽しい時間だった。

しかし、ある日、突然恩師と連絡が取れなくなった。仕事のトラブルが原因で、自分の教会の牧師が、「（恩師は）牧師を退職して故郷に帰った」と、説明してくれた。私達は、驚きと悲しんだ。トラブルについては、真偽の不明もあるし、何らか深い事情があることは想像できた。しかし、我々に連絡なく、居なくなったことが、何より悲しく驚きだった。私達は、恩師がいつか連絡をくれると信じて待つこととした。

数年の時が経ち、ある日見知らぬ電話番号から着信があった。恩師だった。恩師は、連絡なく消えてしまったことを何度も詫び、状況が落ち着いたので、会って説明したいと言われた。そして、冒頭に記したとおり、私は、恩師の住む九州に向かうこととなった。

人と人との縁は、神様からの恵みだと思っている。私自身、他者から学び、影響を受けて成長してきた。当時の自分にとって、恩師も含めた仲間との交流が、どれだけ大切だったか、失って分かった。ただ、不思議とこのように思っていた。「きっといつかまた、神様がこのご縁を用意してくれる」と。何故か私は、そう思っていた。「神様が私達に必要なものを知っているはず。その日が来たのだ」と、電車の景色を見ながら悟った。

再会を果たし、今でも、恩師や仲間との交流は続いている。私は出会った頃の恩師の年齢を超え、すっかり中年になった。それでも、神様のくれたこの縁が大切なことは変わりない。人生の旅は続く。神様はきっと私に必要なものを用意してくれていると信じて、この旅を続けようと思う。

1197字